（第3種郵便物認可）

読売新聞
栃木 TOCHIGI

宇都宮支局 〒320-0822 宇都宮市河原町 1-4 電話 028-638-4311 Fax 028-638-8300
小山支局 〒323-0807 小山市城東 1-7-30 電話 0285-22-0855 Fax 0285-23-1556
日光支局 〒321-1266 日光市中央町 1-6 電話 0288-21-2434 Fax 0288-21-4413
足利通信部 0284-41-2969 栃木通信部 0282-22-1150 佐野通信部 0283-22-1111
真岡通信部 0285-82-2672 大田原通信部 0287-22-2115 那須塩原通信部 0287-62-2829

購読、配達
北部読売会 028-638-6300 Fax 028-636-0550 南部読売会 0285-30-2343 Fax 0285-21-4341
関連会社
広告 028-635-1261 折込 028-612-2015 旅行 028-624-8181 文化センター 028-636-1818
栃木よみうり編集部 028-638-5200 栃木南部よみうりタイムス編集部 0283-85-8743

メールは utsunomiya@yomiuri.com へ

採石場跡 広がる地底湖

大谷石ルネサンス 1

宇都宮市名産の「大谷石」と、その生産地の魅力と可能性を見直す動きが活発化してきた。採石場跡地を観光資源や別の産業に利活用する動きが広がる。石材としての販路の拡大も探られ、アートとの相性の良さで脚光も浴びる。採石業者や出荷量が減り続け、東日本大震災や度重なる陥没事故でとかく「負」のイメージがつきまとった大谷石。斜陽の時代を抜け出し、「ルネサンス」を迎えることができるのだろうか。

ボートで冒険 観光新ルート

切り立った巨岩と木々に囲まれた郊外でシャトルバスを降りた。ほの暗い採石場跡地の入り口へと進み、ヘルメットについたライトを頼りに、一同ぞろぞろと坑道を下る。

異業種の民間4社が今年5月に試験的に始めた「地底湖クルージング」。採石場跡地を観光に活用する試みで、現在は宇都宮市の助成を受ける。同行した今夏、地上はうだるような暑さなのに、坑道を下るにつれて、肌寒いほど。吐く息が白くなった頃、目の前に地下水の「湖」が現れた。不思議な静けさだった。

クルージングは6～8人乗りのラフトボートか、1人乗りのカヤック。カヤックを選び、引率者から漕ぎ方のレクチャーを受ける。出航地点は白い石の粉でまるでビーチのようだ。いざ、地図のない探検へと出発した。アドベンチャー映画の主人公の気分だった。

奥地に、上陸できる場所があった。カヤックを下り、狭い岩のはざまを少し歩くと、神秘的な空間にたどり着いた。地上から差す陽光と白っぽい石壁のコントラストは、まさに県都の「地下神殿」。言葉を失い、たたずんだ。

▲ 地底湖クルージングは、天井ぎりぎりの航行がスリル満点（今年8月、大谷採石場跡地で）＝江原桂都撮影

◇

JR宇都宮駅から北西に約8キロの郊外に、東西4キロ、南北4キロにわたって広がる宇都宮市大谷地区。NPO法人「大谷石研究会」によると、江戸時代に凝灰岩の一種の採掘が本格化し、やがて「大谷石」と呼ばれるようになった。採石場は、現在でこそ8か所のみの稼働だが、跡地や廃坑を含めると250か所にも及ぶ。露天掘りはごく一部で、大部分は地下採掘だ。

地下採石場は、縦か斜めに坑道を作り、深さ10～120メートルの地層から掘り始める。掘り進める過程で、採石場内には、しみ出した地下水が所々でたまり、水路もできる。特に「大道寺石材」の跡地は水量が豊富で、貯留水は水深4メートル、約2000平方メートルにわたる。「地底湖クルージング」をはじめ、跡地を利活用した試みは主にここで繰り広げられている。

クルージングは、宇都宮市の建築設計会社「ピルスタジオ」を中心に、旅行や不動産など業種の異なる4社が共同出資して、「チイキカチ計画」と名付けた有限責任事業組合を設立して主催する。5月から試験ツアーを繰り返し、来春のツアー開始を目指している。

宇都宮市は、地域資源としての魅力を認め、今年度創設した「大谷特性活用補助制度」で、費用の半額（上限は年間200万円）を助成している。

来春からのツアーの本格開始に向け、会議を重ねる塩田代表（左奥）ら

地域資源を掘り起こす

クルージングの仕掛け人で、ピルス社の塩田大成代表(37)は「我々の目標は地域資源の掘り起こし。一時的な利益を追うのではなく、息の長い取り組みにしたい」と力を込める。「こんなに神秘的な空間があるなんて」「外国の世界遺産のようだ」。ツアー参加者からは好評だ。

◇

大谷石の歴史を紹介する「大谷資料館」は、別の採石場跡地を利用して1979年に開館した。地下約30メートルの採石場跡地も公開され、近年はコンサート会場や映画の撮影にも活用。2010年には約10万人が訪れた観光スポットだ。

東日本大震災で休館を強いられたが、地元の建設業「大久保」が今年4月、2年ぶりに再開にこぎ着けた。10月末までの入館者数は約6万6000人と人気は健在。このほか、稼働中の地下採石場現場に観光客を案内できないか模索する採石業者もいる。

地底観光の名所として売り出したい――。「大谷」が今、大きく変わろうとしている。（江原桂都）

地上の跡地では、古代遺跡のような場所も

創る Create

食材PR、石材加工体験

地上でも、大谷地区へ観光客を呼び込む動きは活発化している。石材の産地としての魅力と地元食材を使ったグルメを組み合わせた新たな観光ツアーが、この冬から地元の民間業者らの手で始まる。国内旅行情報の全国誌「じゃらん」で、紹介されることも決まった。

「ギョーザ以外にも宇都宮には観光資源があることを、全国の人に知ってもらいたい」

新たなツアーを仕掛けるのは、農産物販売や観光振興を手掛けるファーマーズフォレスト社の石原綾子さん(33)。石材加工の体験施設「大谷石体験館」の協力も得て、10月中旬までにツアー企画を練り上げた。

題して「伝統文化まるごと体験～石の里・里山食に出会う空間～」。12月から3月1日まで、木曜を除く毎日催行する予定だ。

大谷資料館の見学に始まり、散策で大谷石と里山の自然が織りなす周辺の景観を楽しみ、大谷石の絵つけを体験し、「里山ランチ」に舌鼓を打つ。栄養士でもある石原さんは、大谷の新米や上河内特産のユズ、新里の「曲がりネギ」など、大谷の近隣エリアでとれる旬の食材がいっぱいのランチを仕立てた。石の文化に加え、農業文化も息づいているとPRする狙いがある。

「宇都宮市、特に大谷地区は冬が来ると観光客の足が鈍る。このツアーで現状を変えたい」と石原さん。じゃらんでは、知られざる冬の体験観光ツアーを取りあげる特集の中で掲載される予定。にぎわいと活気をもたらせるか――。